



うれしのほ本  
塩田編

人と物資が集まる交通の要衝

伝統伝える職人と商人の町・長崎街道「塩田道」塩田宿

平安の女流文学者を代表する恋多き歌人・和泉式部が幼少時代を過ごした塩田。江戸時代には、長崎街道「塩田道」の宿場町としてにぎわい、古くから塩田川の水運を利用した、水陸の要衝として発展した。

肥前国風土記に「潮高満川」(潮が高く満ちる川)と記されている塩田川。有明海の満ち潮を利用して船が往来して栄えた塩田津の港には、有田焼の原料である天草の陶石や農産物といった荷が運ばれ、塩田の粘土を使って焼いた志田焼の大きな水壺は塩田津を出て、途中で積み変えられて遠くインドまで送られた。物が集まる場所には人が集まり、人が集まる場所には商売人が集まるもので、塩田川沿いや街道沿いには船頭や蠟屋、饅頭屋、陶器屋、銀細工屋など多種多様な商家がびっしり連なっていました。商人など各地から宿を訪れた人たちが食事をしたり、商売の交渉をしたり、商店の客を呼び込む威勢のいい掛け声が聞こえたり、故郷への土産を買ったりと通りには多くの人が行き交いにぎやかだっただろう。

それを証明するように、1866年の伊東家文書「塩田町絵図」には100を超す商家が描かれている。長崎出島のオランダ商館医ケンペルの『江戸参府旅行日記』にも「塩田村に一泊。ここは煙の多い村」とある。窯元が焼きものを焼成するときの煙や、旅籠や家庭のカマドで煮炊きするときの煙が町を覆っていただろう。生活の匂いが漂ってくる。

**必見!**  
うれしの茶のシンボル  
大茶樹

推定樹齢350年、うれしの茶の父・吉村新兵衛が不動山で植えた茶樹のうちの1本といわれている「大茶樹」は枝張り80平方メートル、樹高約4.6メートルと巨大な茶樹です。うれしの茶のシンボルで、国の天然記念物にも指定されています。

吉村新兵衛が育てたうれしの茶は今、嬉野温泉にも利用されています。石が作られた大きな急須からうれしの茶がそがれる露天風呂。お茶と嬉野温泉の成分が合わさって湯の色は茶褐色に変化します。茶の温泉に浸りながら、茶葉が入ったパックで顔や手足をパッティングすると美肌にも効果倍増です。

嬉野にはうれしの茶の効能を最大限に生かそうと、嬉野温泉旅館組合「おかみの会」の女将たちが試して納得してオリジナル商品があります。うれしの茶や、うれしの茶のエキスを使ったつるつるすべすべお肌になる「うれしの茶の美肌石けん」「うれしの茶クレンジングフォーム」「うれしの茶ボディソープ」「うれしの茶リンセスinシャンプー」です。お土産としても手軽で喜ばれ人気があります。

嬉野温泉の中心街には、嬉野温泉の特産品がずらりと揃い、嬉野の情報がゲットできる「嬉野交流センター」があります。嬉野温泉巡りは「嬉野交流センター」からはじめませんか。



女性に人気の「茶風呂」



日本最古の茶樹「大茶樹」



嬉野のお土産や情報のチェックなら「嬉野交流センター」



column.03

「煎茶の祖」高遊外売茶翁 (1675-1763年)

煎茶を広めた高遊外売茶翁は、佐賀藩本藩とともに嬉野と塩田も治めていた佐賀藩蓮池支藩(現・佐賀市蓮池町)出身。つまり、同じ領地に煎茶の祖が生まれ、嬉野茶が育っていた。塩田には売茶翁の父・柴山権現の墓もあり、嬉野地区との縁は深い。京都に日本初の茶店「通仙亭」を開いたときにはひょっとするとうれしの茶も利用されていたかも。すると日本初のアンテナショップかもしれない!?

のほほん  
マップ